

遺言

遺言は次のように始まっていた

「私はプラスチックであった。
それ以外の何物でもなかった。
そのように思っている。」

描写ということの残酷さは
描く者にとっても
描かれる者にとっても
共通の鏡であるはず
だが彼はそれのみを拒んだ

「ああ、私を変質させる太陽よ
今さらお前にくれてやるものなどない。」

「白いキャンバスをカラフルに汚すことと
そこに血痰を吐きかけることとの間に
どのような違いがあるのか。」

「絶望というものを私は知らない。
むしろ、それを自認する者を羨む。」

残された作品の多くを
僕は途方に暮れたまま
引き取り、保管している
それを見ていると
彼が最後に望んでいたことが見えてくる

彼は最後に^{したた}認めていた

「あらゆる作品がまとわりついてくる。
君もまた同じ。」

僕は憎むべき青空を仰いだ
穏やかで
清浄で
手の届かないもの
汚すことのできないキャンバス

僕が彼を追うことはできない
テリアのように彼の足首を掴み
嫌悪に引きずられることなど
生き続けるしかない
永遠に

(2011.6.19)